いふ、予答て云、吾妻橋は、吾嬬神社のかたへわたる橋なればこの名あり、例せば麻布こふがへ橋は、國府のかたへ渡るといふ義をとりて、國府方と唱たるが如し、かゝる類、穿鑿せばいくばくもあるべし、

鎧渡

〔紫の一本下渡〕鎧の渡

八丁堀牧野因幡守殿の屋鋪の東河岸より、小網町への渡しをいふ、今は一文渡しともいふ、

〔江戸砂子一日本橋南〕鎧渡（よろひのわたし）　かやば町より小あみ町二丁目へわたす所

里諺に云、往古は此所入江にして大わたり也、源頼義公奥州責のとき、俄に風おちて、浪はげしかりければ、鎧をしづめ、龍神に祈り給ふと云つたへたり、又平將門の事につけて、おなじやうなる云つたへあり、

下總國古河渡

〔書言字考節用集一乾坤〕許我渡（コガノワタリ）下總猨島郡

〔榻鳴曉筆二十同名〕和國名所

久我　渡　下總

〔廻國雜記〕古河といふ所にて、ふねにのりて、

こがくれにうかべる秋の一葉舟さそふ嵐を川おさにして

川ふねをこがのわたりの夕なみにさしてむかひの里やとはまし

〔萬葉集十四東歌〕相聞

麻久良我乃、許我能和多利乃、可良加治乃、於登太可思母奈、宿莫敝兒由惠爾、

安波受之氐、由加婆乎思家牟、麻久良我能、許賀己具布禰爾、伎美毛安波奴可毛、

〔萬葉集抄十六〕こがのわたり　下總國

〔夫木和歌抄二十六渡〕百首歌

從二位家隆卿